英雄と呼ばれた男

主義

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは転生したらターニャに兄が居たらというお話です。

目　次

私の兄貴 ―― 1
選別 ―― 5

私の兄貴

アラム・デグレチャフ。転生した私の兄貴であり、軍人として働いている。兄貴は国に暮らす者たちから「英雄」だの「百年に一度の天才」とか言われているが私から見たら兄貴はとても天然な人間だ。

兄貴はとても優しくて他人のことを心配してしまう。前の世界でエリート街道を突っ走っていった私的にはこういう人間は絶対にエリート街道を突っ走れない人間だ。社会では人を蹴落とさなければならない状況に陥ることもある。その時に人を蹴落としても上に進もうと思えなければエリート街道は走れない。

前の世界でもし、兄貴のような人間と会っていたら私は目にも留めなかっただろう。

兄貴の優しさは私の腐った心が浄化されていく。出世のことを一番に考えて他のことを二の次に考えていた時の私と違って今の私は出世のことも少しは考えているけど一番は兄貴だ。

兄貴のお陰で今の私の精神は安定しているんだ。だから簡単に言うと私の精神安定剤だ。こんなに一人の人間に執着するのは生まれて初めてのことで自分でもあんまり理解出来ていない。前の世界の私が今の私を見たら「何やってんだ！」とか言われそうだが…私はこれで良いと考えていたりする。兄貴と一週間でも会えないと私は敵、味方関係なく殺してしまう。

それほどまでに私は兄貴に依存している。だが、私は一度たりとも兄貴に対して好印象な言葉を使ったことは無い。今まで甘えることをしてこなかったから…急に誰かに甘えるとなった時に甘える事が出来ない。別に甘えたいというわけじゃないが…自然に甘えられ

る人が羨ましくないと言えば嘘になる。まあ、兄貴は私が急に甘えるようになったら逆に驚いて今まで見たいに普通に話す事が出来ないのではないかなと考えたりすることもある。

だからどこか踏み出せない。

私が生を受けて…初めて特別な感情を抱いた兄貴のことを私は死んでも守り抜く。

「兄貴、私はもう一人前の戦士なのだから心配しなくても大丈夫だ。兄貴は過保護なところがあるから、こちらの方が兄貴のことを心配だ」

私はいつもの口調で兄貴に向かって言った。すると兄貴はいつものように…笑みを浮かべていた。兄貴が笑みを浮かべていない日を今まで一度も見たこと無い。あんなにいつも笑っていて疲れないのかと私的には思ってしまったりする。

「ボクの方は大丈夫だよ。適当に仕事をこなしているしね」

こんな笑いながら「適当に仕事している」と言う人間がいるのだろうか。兄貴だから許されるが…他の兵士がこんなことを言っていた

と上層部に言われたらその人間は首を切られる可能性が高い。

「適当にこなしている……か。国の最後の切り札とも呼ばれている兄貴が言うセリフではないと思うが」

「良いんだよ。ボクは皆が期待する良い人間ではないんだよ。ボクが軍人をやっているのも衣食住を安定させるためだしね」

「まあ、それが人間の働く目的だから兄貴も普通ということだな」

「そうかもしれないね」

兄貴は満面の笑みを浮かべながらに口にした。

兄貴は普通であることを望んでいるのだ。生まれてすぐに天才と呼ばれ、期待を背負ってきた兄貴にとって『普通』とは縁遠い言葉だ。だから普通に憧れている。

前に一度、「兄貴は生まれ変わるなら何に生まれ変わりたい?」と聞いた事があった。その時の兄貴の返答は「まあ、何でも良いけど普通なものがいいな。疲れないもの」と言っていた。

これはそんな兄貴と転生した私の物語。

選別

僕は世間で言われているほど凄い人間ではない。只、人より少し優れていただけでそれだけなのだ。別に特別な事があったわけではなくて…普通なのだ。そして多くの兵士たちは僕を見ると恐れをなして離れて行ってしまう。僕、個人的には何かをした訳ではないと思っているんだけど……何でこんなに離れるんだろう。そんなに僕って怖いのかな。

後、僕には妹が存在するのだけど……とても可愛い。正直、妹には戦争という面倒なものに巻き込みたくはなかった。だけど運が悪く実地訓練を行っている時に戦争に巻き込まれてしまった。すぐにでも加勢したかったけどその時は僕も色々と忙しい時期で加勢することが出来なかった。どうやら後々、聞いてみると妹はとても良い結果を残したようで『銀翼突撃章』を受賞した。

まさか妹も受賞するとは微塵も思っていなかった僕にとっては今世紀最大の驚きだった。それからも妹は順調に階級を上げている。このまま行けば僕に追いつくのも時間の問題かもしれない。妹にその話をした時は「そんなことあり得ません。私がいくら結果を残したとしても兄貴と同じ階級にはいけないよ」と言っていた。

僕の階級は軍の中ではかなり上の方で『大将』という地位に在籍している。ここまで地位が高くなってしまうと前線に出て戦うということはほとんど無くなってしまう。だからこそ、僕は自分の腕が鈍っているのではないかと最近は心配していたりする。さすがに最後に前線に出た時から時間が経ちすぎているからね。

まあ、そんな感じで今日も僕は適当に生きている。

今、僕はある部屋に座っている。この部屋は決して大きくないし、見栄えのするような部屋とは天と地ほどの差があるだろう。その部屋の中央では二つの椅子が向かい合うように置かれている。

「ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブリャコーフ」

僕は一人の女子隊員の情報が載っている紙を見ていた。他にもテーブルには紙が散乱している。その紙、一つ一つに兵士の個人情報が書かれている。

この子の実力は書面上だけで全てが分かるわけではない。でも、少なくとも見ないよりはいい。この書面を見る限り、兵士としての才覚をあるようだ。まあ、そうでなければ一般人が兵士になることなんてない。

僕の目の前に腰を下ろしている者は僕がこんなものを見ているのが謎なのだろう。ずっと僕の方を見ている。この人物の名はエーリッヒ・フォン・レルゲン。階級は中佐。とても優秀な人物でこれからのこの国を背負っていく人物であるのは明白だ。妹のターニャも彼の賢さに関しては認めていると聞いている。

「それにしても大将のあなたが一般兵の情報なんか知ってどうするん

ですか？」

「あ、これは少し興味があってね、それだけだからそんな目で僕を見ないでくれ」

「…いや、別に変な目で見ていたわけでは」

「まあ、君が気にするのも分かるけどね。だけど本当に何もないから、強いて言うなら…選別かな」

「選別ですか……」

そのような会話がこの部屋では繰り広げられていた。